

「メリトクラシー」から 学んだ社会科学の世界

近藤博之

大阪大学 名誉教授

教育社会学における自分のキャリアのなかで
たえず気になり、たびたび読み返してきた3
冊をあけてみたい。それらの理解を通して社会科
学の面白さ、奥深さを学んできた。

学校化社会の卓抜な素描

『メリトクラシー』 マイケル・ヤング著

窪田鎮夫・山元卯一郎訳、至誠堂、1982年

本書は、戦後のイギリスで社会改良家として活躍した著者が、エリート主義的な能力選抜の行きつく先を風刺的に描いた物語である。フィクションとはいえ19世紀以降の史実を踏まえており、現代技術と融合した学校化社会の未来をリアルに予言している。これ以降、著者の造語である「メリトクラシー」が社会科学の世界に定着したが、私が本書を知ったのもそうした学術用語を通してであった。

1985年SSM調査に参加した頃、私はカテゴリカル・データの分析に興味をもち、教育と社会移動の関係を対数線形モデルで検討しようとしていた。そのときに、変数間の関連を表すモデルの1つがメリトクラシーの概念に対応していると考え、それを「学歴メリトクラシー」と表現した。その後、同型のモデルの帰趨が移動研究のなかでIMS (Increasing Merit Selection) 仮説として広く問題にされるようになったが、メリトクラシーを暗に社会の理想とみなすそうした用語の使用は、実のところ著者の意図からは外れている。というのも、本書は人間の価値をメリットに還元し、社会分断を招くような政治体制に対して危惧を表明したものだからである。それゆえ、20世紀末に時のイギリス首相がメリトクラシーの実現を連呼したときに、著者は「彼がこの本を読んでいるとはまったく思われぬ」と皮肉を述べたのであった。

現在でも、この語を通して社会の興味深い動きが見えてくる。たとえば、アメリカでは学歴別の所得差の拡大がメリトクラシーの貫徹を意味するも

のと解釈され、教育機会の問題も「IQ + 努力 = メリット」の本書の定義に合わせて、SAT得点に逆境スコアを加味すれば公正が保たれるといった議論が真面目になされている。他方、近年のイギリスではメリトクラシーの負の側面に光が当てられ、たとえばプレグジットの動きがこの物語に即して読み解かれている。また、最近の労働党はこれまで重視してきた社会移動のタームを政策理念から外し、メリトクラシーによる教育理解を放棄するに至ったらしい。

学校化された社会の明と暗の両面が、半世紀以上も前に（原著の出版は1958年）、才能豊かな人によって書き込まれていたということである。

ラディカル派による 不平等の実証分析

『アメリカ資本主義と学校教育

—教育改革と経済制度の矛盾— [I・II]

サミュエル・ボウルズ & ハーバート・ギンタス著

宇沢弘文訳、岩波書店、1987年

教育と不平等に関する議論が沸騰していた1970年代に本書の原著が出版された。経済学者である著者たちは、世代間の所得伝達が必ずしも教育によって媒介されていないこと、そもそも認知的スキルの差が経済的不平等をもたらしているわけではないことを、従来の変数構成にIQテストの結果を加味して論証している。彼らは、それまで支配的であったリベラル派の教育言説を否定し、ラディカルな見地から学校と職場の社会関係や両者においてサンクションとして働く行動特性の類似性に注目する。

修士論文で頭を悩ませていた頃、たまたま神保町の書店で原著を見つけた。それは、大学院に進んだものの先の見通しが何もない自分にとって一筋の光明を与えてくれるものだった。その当時、研究室でも様々な質問紙調査が行われていたが、



そこから垣間見えるのとは違う実証分析の世界が2人の経済学者によって展開されていたのである。

とはいえ、内容がすぐに理解できたわけではない。パス解析の手法もそうだが、調査結果そのものではなく「真の」相関が扱われていることに戸惑った。また、IQを含めて地位変数の相関が異なるデータから求められていることに驚いた。調査データによる分析は同じ調査のなかで完結すると常識的に考えていたが、本書では複数の調査結果がいわばモニタージュスされているのである。そうしたことも含めて、彼らのいかにも社会学者らしい取り組みにわくわくした。

世紀が変わる頃、著者たちは地位達成モデルに遺伝メカニズムを明示的に組み込み、新しいデータを用いて再分析を行っている。それによると、「かつての主な科学的知見は依然として確からしく、むしろこの四半世紀に妥当性が高まっている」とのことである。彼らの分析はいまだに新鮮であり、知的刺激に富んでいる。実証研究の世界に彼我の違いはあるものの、厳密な手続きでなされた調査や精密なデータ分析はなるほど息が長いものだとつくづく感心する。

個人と社会のトポロジー

『ディスタクシオン—社会的判断力批判』

[I・II] ピエール・ブルデュエ著

石井洋二郎訳、藤原書店、1990年

抽象的概念からなる理論書とたくさんの数字が並ぶ調査報告書を混ぜ合わせたら、多分こんな感じの本になるだろう。理論とデータの距離が近く、著者は両者の間を自由に往還する。それより、文化資本、ハビトゥス、社会空間、場など、雲をつかむようなブルデュエの概念が、たしかにそのように理解するのが妥当だろうと納得させられる。メリトクラシーはここにも登場する。ただし、それが実現していないという批判ではない。メリトクラシーの理念そのものが特定の社会集団の利害関心にもとづいており、学校による選抜は能力の定義も含め

て一種のゲームであるというのだ。そうした現実分析には、メリトクラシーに関心をもつ研究者の立ち位置をも明らかにしてしまう油断のなさがある。

私の場合、最初から本書の内容に惹かれたわけではない。文化の素養を欠いていることもあるが、本書を用いた議論の多くが恰もブルデュエのように感じられてむしろ敬遠していた。それが何度も読み返すようになったのは、教育と階層の定型的な分析に疑問を感じ、変数カテゴリーの意味を一旦保留して、正準変数により現実の関連を記述しようと考えたからである。この本を皮切りに著者が多用するようになる(多重)対応分析がまさにそのような方法だった。恐らく、私のようにデータ分析の方法から著者の作物に近づいて行った人間はあまりいないだろう。

本書と社会調査の重なりは大きい。たとえば、第8章「文化と政治」は、社会心理学者が問題にする response style の社会学版といえる。それを含めて、ここで示された社会分析は、著者に好意的な統計学者が「ディスタクシオンのパラダイム」と呼ぶように、きわめて体系だったものである。変数どうしの関係とともに個人の位置を空間的に把握しようとするその方法は、まさに質問紙調査の幾何学的分析と呼ぶに相応しい。本書には、通常の仮説検証型の実証分析(変数の社会学)が知的怠惰に陥りやすいこと、測定される関係の諸条件を問うことが重要で、そこに質問紙調査の関係的特徴が浮かび上がってくることなど、調査研究の意味を考えさせられる論点がたくさん登場する。社会調査に関わる人が一度は丁寧に読んでみるべき本だと思う。

3冊とも外国(英・米・仏)の教育社会を扱った翻訳書だが、社会の学校化は共通なので、その内容はわれわれにもたいへん身近なものに感じられる。現在の日本の状況と比べながらこれらの古典を紐解いてみれば、何かしら面白い発見が得られるに違いない。